

# 以和為貴

小平浪平ものがたり

わをもつて  
とうとしとなす



栃 木 市



栃木市マスコット  
キャラクターとち介

# はじめに

わたしたちのまち栃木市は、「くらの街とちぎ」として知られています。れきし的建ぞう物やゆたかな自然にめぐまれ、多くの魅力にあふれています。そんなれきしある栃木市で生まれ、人や社会の役に立つせい品をつくる世界的な会社をつくった偉大な人がいることを知っていますか？

HITACHIという名前は、みなさんも一度は耳にしたり、その会社のせい品を使ったりしたことがあるでしょう。そう合電機メーカー、株式会社日立製作所のそう業者、小平浪平は、わたしたちのまち栃木市で生まれました。

栃木市で生まれた小平浪平はどのように育ち、どんな希望をいだいて努力し、どのように失敗やざ折を乗り越えて世界的な会社をつくることができたのでしょうか。それを知ることで、わたしたちのまちにほこりを持つとともに、これからのみなさんの人生や自分のゆめの実現のための参考になることを願っています。



## もくじ

|                           |       |
|---------------------------|-------|
| ◆ 小平浪平の紹介                 | 03    |
| 小平浪平ものがたり① 栃木市の合戦場で生まれる   | 04    |
| 小平浪平ものがたり② 電気工学を学ぶと決める    | 05    |
| 小平浪平ものがたり③ 鉾山で発電所をつくる     | 06    |
| 小平浪平ものがたり④ 反対をおし切り日立鉾山へ   | 07    |
| 小平浪平ものがたり⑤ 外国せいの機械から学ぶ    | 08    |
| 小平浪平ものがたり⑥ 純国産の5馬力モーターの完成 | 09    |
| 小平浪平ものがたり⑦ 数々の問題に立ち向かう    | 10    |
| 小平浪平ものがたり⑧ 社会にこうけんした一生    | 11    |
| ◆ 小平浪平が残した功せき             | 12-13 |
| ◆ 栃木市のゆかりのしせつ             | 14-15 |
| ◆ 小平浪平の生がい年表              | 16-17 |
| ◆ もっと深く学びたいときは            | 18    |



## すぐれた自主ぎじゅつ・せい品の開発を通じて社会にこうけんする

1874年(明治7年)1月15日、栃木県下都賀郡家中村合戦場(今の栃木県栃木市都賀町合戦場)生まれ。東京帝国大学工科大学(今の東京大学工学部)電気工学科卒業。

1906年(明治39年)久原鉾業所(今のJX金属)日立鉾山に入社。1910年(明治43年)に純国産の5馬力モーターをせい作し、日立製作所をそう業。1920年(大正9年)に株式会社日立製作所となる。

「すぐれた自主ぎじゅつ・せい品の開発を通じて社会にこうけんする」という思いで事業をかく大させ、日本を代表するそう合電機メーカー、株式会社日立製作所のきそをつくった。また人材育成のために、徒弟養成所(今の日立工業せんしゅう学校)を開校するなど、社会こうけんにも力を入れた。

# と ち ぎ し か っ せ ん ば う 栃木市の合戦場で生まれる



小平浪平は、1874年(明治7年)1月15日、栃木県下都賀郡家中村合戦場(今の栃木県栃木市都賀町合戦場)で小平家の次男として生まれました。当時の栃木は巴波川の舟運(舟を使ってモノを運ぶこと)で栄えており、浪平の父も舟に関係した仕事をしていました。

浪平は淑慎学舎(今の合戦場小学校)に通い、教育熱心な両親のすすめで、11才から転校して栃木小学校へ通いながら、さらに朝は英語学校に、放課後はじゅくにも通って一生けん命に勉強しました。

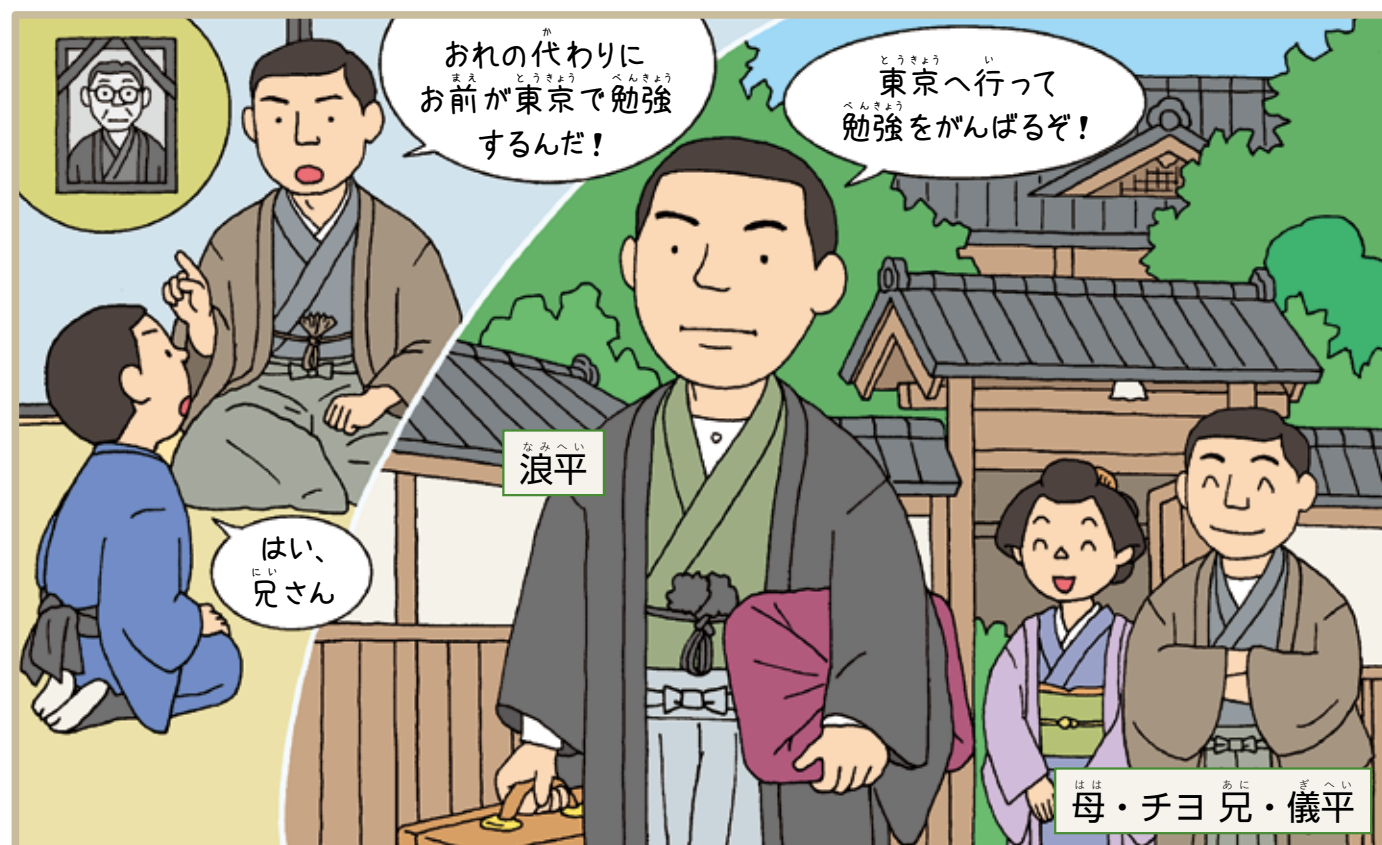
ところが浪平が16才のとき、父が事業に失敗し、借金を残して49才のわかさで病死してしまいます。医者になることを目指して勉強していた浪平の兄・儀平は、家族をささえるために学校をやめて働く決断をします。

そんな兄から「おれの代わりにお前が東京で勉強するんだ」と言われた浪平は、これまで以上に勉強に打ちこみ、17才で第一高等学校(今の東京大学教養学部的前身)に合かくしました。

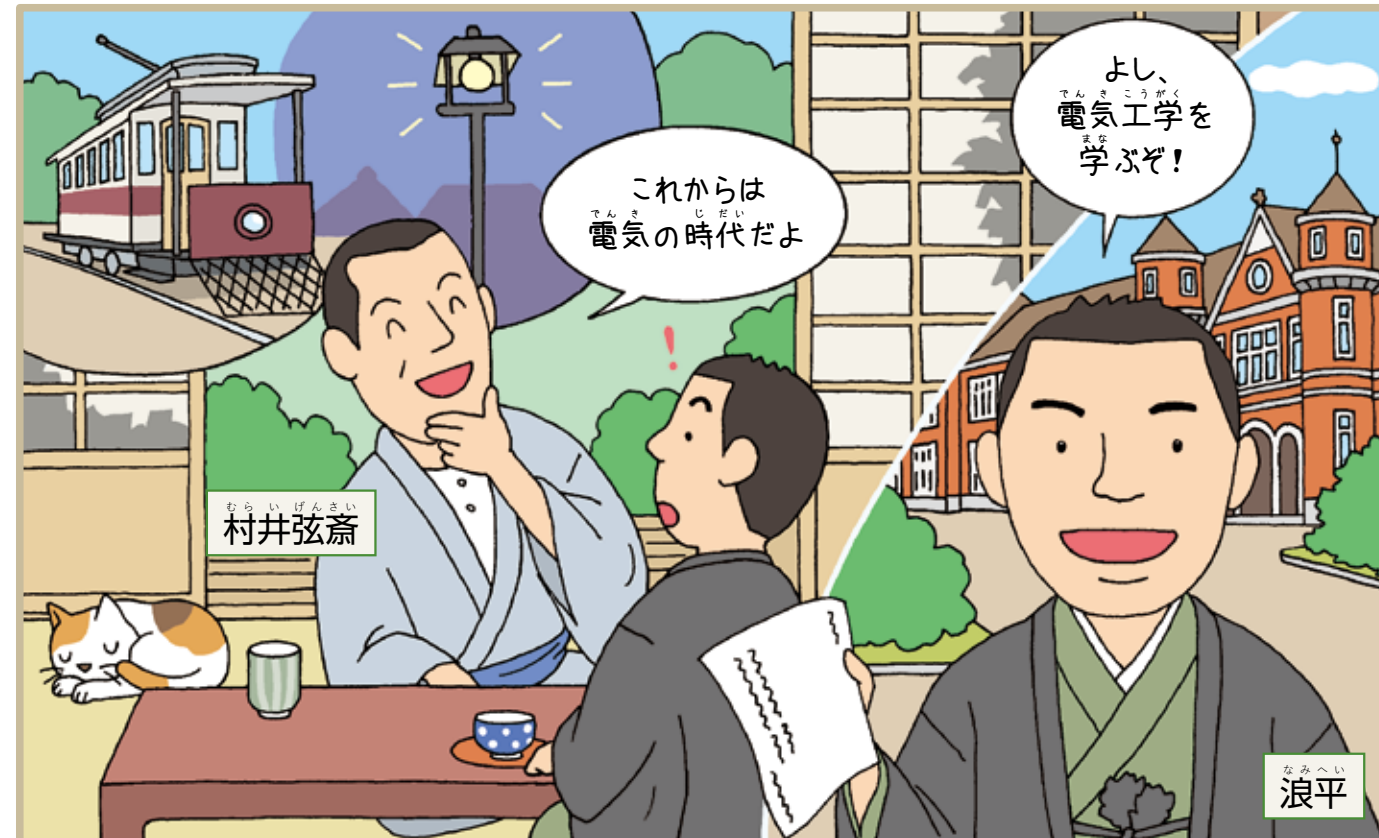
## おし 教 え て ! と ち 介

★当時の学校は今と同じ？

当時の学校せい度では、小学校だけがむ教育だったんだ。ただ当時は子どもも家の仕事を手伝う重要な働き手であり、小学校に通わない子どももいたし、さらにその上の中学校や大学に進学できるのはほんの一部の人だけだったんだよ。



# で ん き こ う が く ま な き 電気工学を学ぶと決める



1894年(明治27年)、第一高等学校の4年生になった19才の浪平は、大学受験を目前にして進路にまよっていました。

「工学部に進みたいけど、そのなかで何を勉強したらいいのだろう」

「工学」とは、科学やぎじゅつを使って社会の役に立つものをつくる学問で、そのなかには建ちくやぞう船、機械電気などさまざまな分野があります。

なやんだ浪平は、浪平が子どものころに勉強をしてくれた小説家の村井弦斎をたずねます。

すると村井は「浪平くん、これからの時代は電気だよ!まもなく日本中に電灯がつく時代が来る。今はじょう気で動かしている機械も、電気で動かすようになる」と熱く語ります。

それを聞いた浪平は、「いつか社会にこうけんできる人間になりたい」と電気工学を学ぶことをけつい決意。そして2年後、浪平は22才で東京帝国大がくこう(今の東京大学工学部)電気工学科に合かくしました。

## おし 教 え て ! と ち 介

★村井弦斎って？

明治・大正時代に活やくした作家だよ。代表作『食道楽』は、当時としては新しい料理や食材を題材とした小説で、大ベストセラーになったんだ。村井は大学をやめた後、あちらこちらを放らうしていたときに浪平の家にいたことがあって、浪平のことを実の弟のようにかわいがっていたんだって。



# 鉱山で発電所をつくる



希望の大学に入学した浪平でしたが、受験が終わって安心したのか、1年目は活動写真（えい画）や旅行などしゅみにお中になって進級できませんでした。必死に働いて仕送りをする兄におこられた浪平は、気持ちを入れかえて勉強に集中。そして26才のとき、ゆうしゅうな成せきで大学を卒業し、秋田県にある藤田組小坂鉱山で電気ぎしとして働きはじめました。

浪平はここで人生を大きく変える出会いをします。それは小坂鉱山で所長をしていた久原房之助でした。久原は大学を出たばかりの浪平に、いきなり「発電所をつくってほしい」と言います。鉱山では、ほり出した銅を運んだり、たくさんの機械を動かしたりするため、大量の電気が必要なのです。

とつ然のことにおどろいた浪平でしたが、発電所をつくる場所選びからせつ計まで一人でやりとげ、なんとわずか2年で発電所を完成させました。「電気こそ日本の近代化をすすめるのだ！」浪平は発電所の建せつにやりがいを感じました。

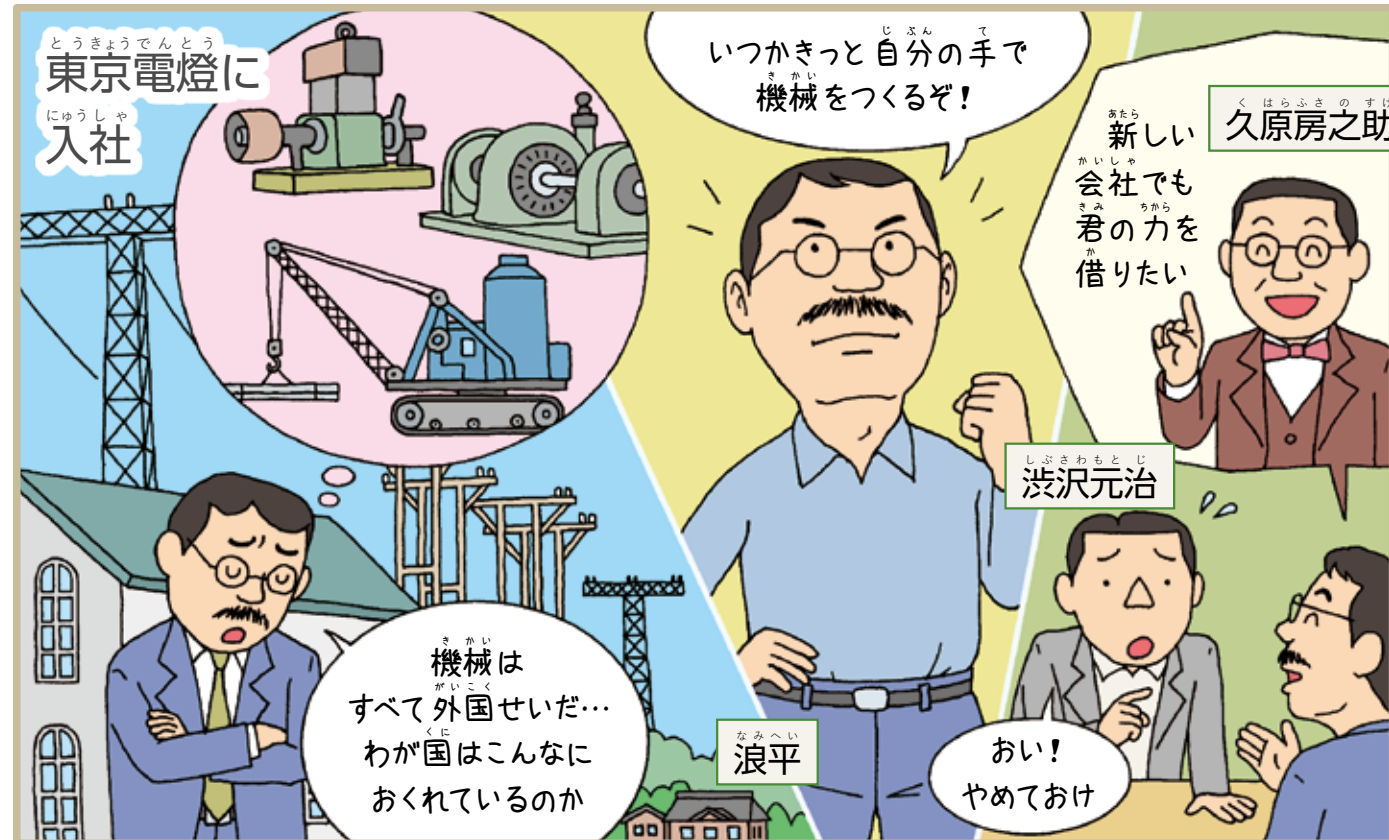
## 教えて！とち介

### ★鉱山って？

地中をほって役立つ鉱物をとる場所のこと。とれる鉱物の種類によって、金山、銅山などと言われるよ。日本は古くから鉱山で金や銀、銅などをとっていて、明治時代には鉱山の近代化が一気に進んだんだ。浪平がはたらき始めた当時の鉱山は、最先達のぎじゅつを使う人気産業だったんだよ。



# 反対をおし切り日立鉱山へ



1904年（明治37年）、浪平は小坂鉱山を辞めます。日本一の電力会社である東京電燈（今の東京電力）が、当時では日本最大の発電所をつくると知ったからです。

「日本最大の発電所づくりに参加したい」と考えた浪平は、31才で東京電燈に入社しました。すぐに大きな工事をまかされてよろこぶ浪平でしたが、そこで大きなショックを受けます。それは、工事げん場で使われている発電機などの機械がすべて外国せいだったからです。

「わが国の工業はこんなにおくれているのか」げん実を目の当たりにした浪平は、「いつかかならず自分の手で機械をつくり、日本の発てんにこうけんする」と心にちかいました。

ちょうどそのころ浪平は、久原から「茨城県の日立にある鉱山を買った。ぜひ君の力を借りたい」とさそわれます。大学時代の親友である浪平元治（浪平栄一のおい）からは「最新の仕事ができるめぐまれた地位を捨ててまで行くべきものなのか」と反対されたものの、浪平は東京電燈をやめて日立の鉱山へ行くことを決めました。

## 教えて！とち介

### ★浪平栄一と浪平元治

浪平元治は新一万円札のしょうぞう画になっている浪平栄一のおいだよ。東京帝国大学で浪平と出会ったんだ。大学卒業後は国家公む員として働いた後、東京帝国大学の教じゅ、名古屋帝国大学（今の名古屋大学）初代そう長になったよ。



# 外国せいの機械から学ぶ

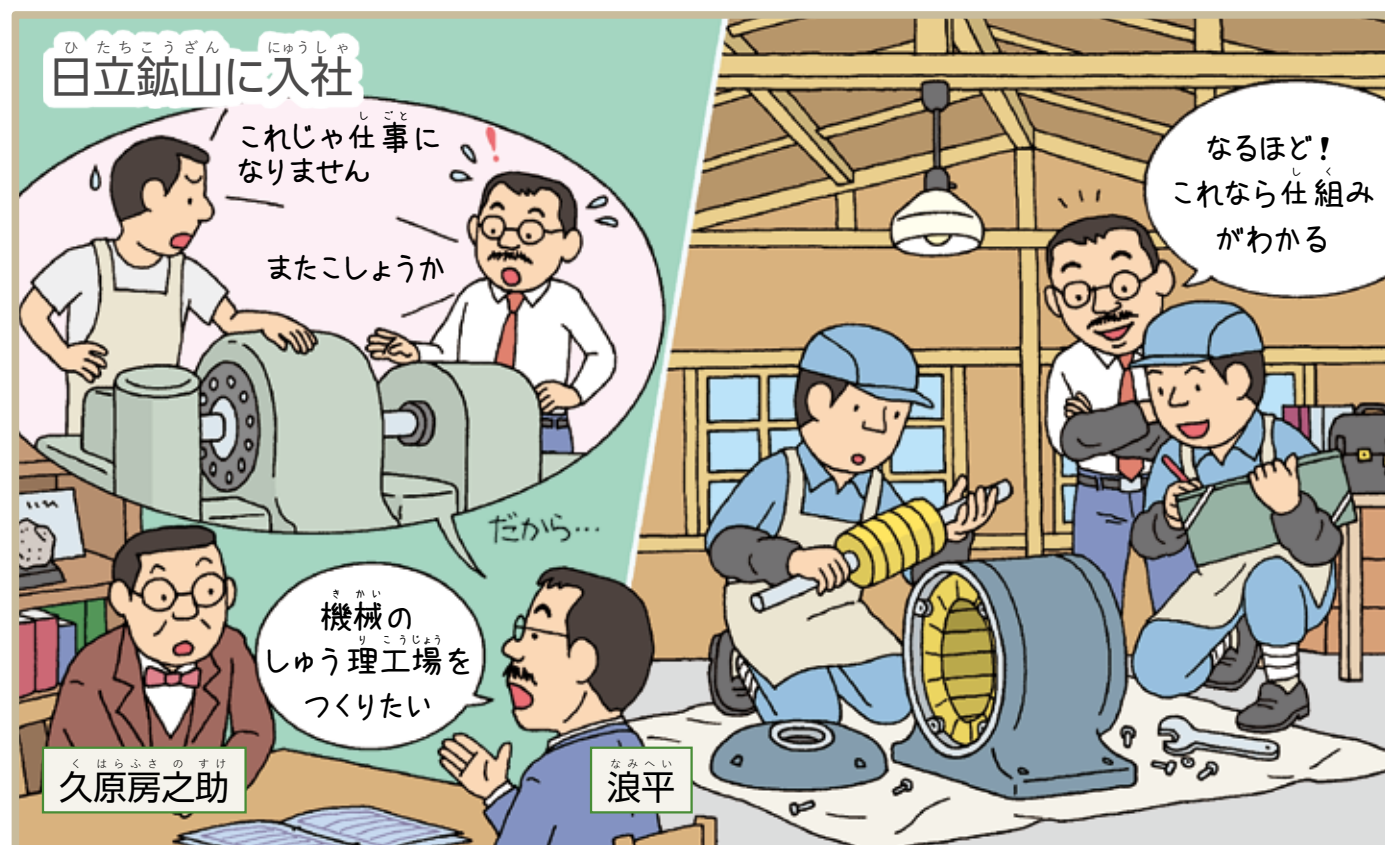


「たとえどんなに苦勞をしても、外国にたよらず、自分で使う機械は自分でつくる！」  
強い決意をもって、浪平は、1906年（明治39年）、久原房之助が社長を務める久原鋳業所（今のJX金属）日立鋳山に工作課長として入社しました。

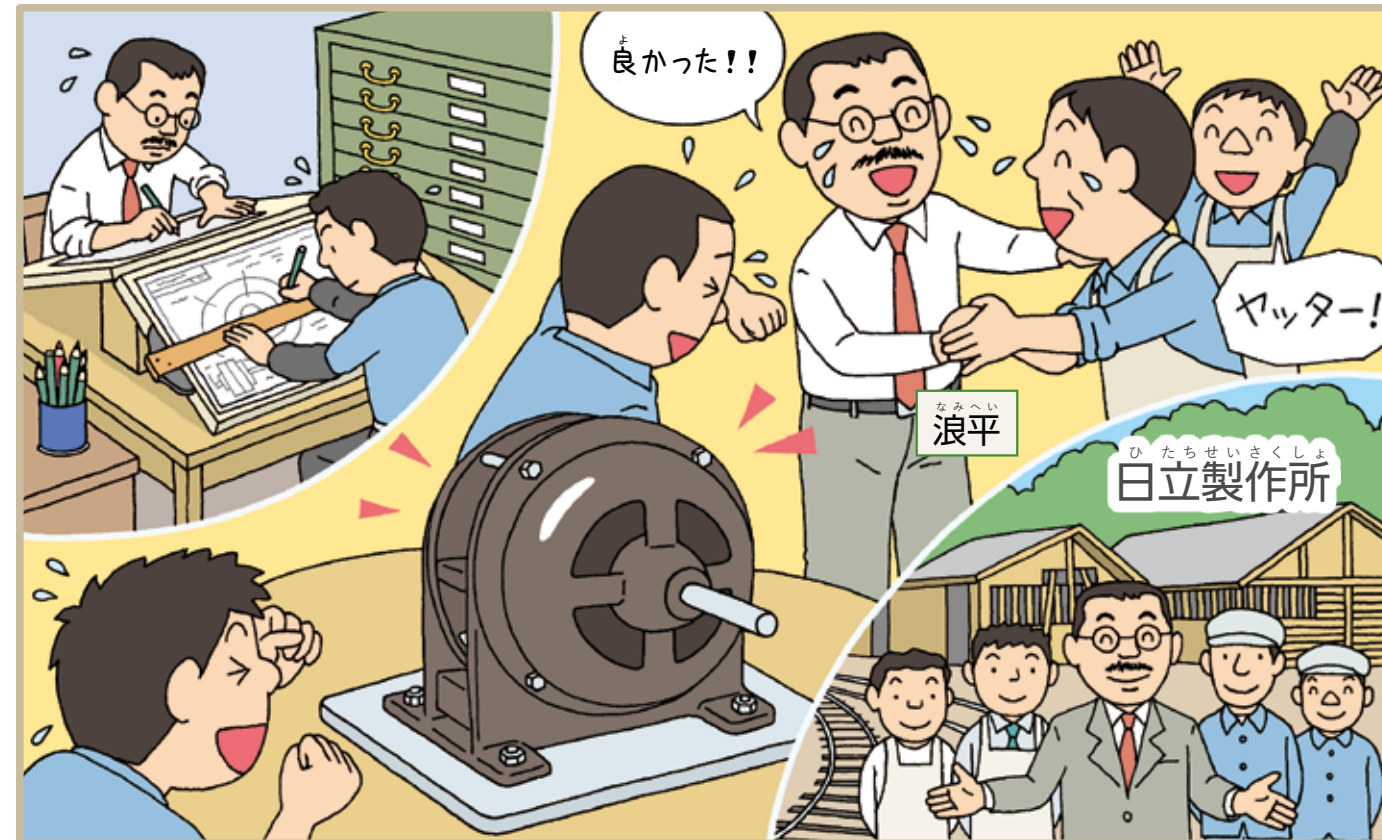
浪平はすぐに仕事を始め、次々と新しい発電所を完成させます。電力がふえて、鋳山の開発が進み、銅がたくさん取れました。すると、使いすぎによる機械のこしょうもふえていきました。

外国せい機械の会社にしゅう理をたのむと、時間もお金もかかります。そこで浪平は、久原に「機械を直す工場をつくりたい」と伝えます。「こわれたらしゅう理に出せばいい」という久原に対し、浪平は「機械を自分たちの手で直せば仕事が早くなる」とうったえ続け、とうとう「しゅう理工場」がつくられました。それは鋳山の一面にある小さな小屋でした。

そんなしゅう理工場には次々とこわれた外国せいの機械がとどきます。これまで一度も自分たちで直したことがないため、わからないことだらけです。それでも外国せいの機械を分かかし、こわれた原いんをさぐって直していくことで、少しずつ電気機械に関する知しきやぎじゅつが身についていきました。「そろそろ自分たちの手で機械をつくれるかもしれない」。浪平のなかにそんな自信が生まれました。



# 純国産の5馬力モーターの完成



ある日浪平は、工作課の仲間に「われわれの手で5馬力モーターをつくろう」と声をかけました。国産モーター開発への挑戦です。しかしそれは楽な道のりではありませんでした。何度も失敗をくり返し、それでもあきらめずに挑戦し続けた結果、1910年（明治43年）3月、ついに5馬力モーターが完成します。純国産モーターのたん生です。

浪平は久原に、機械のせい作工場をつくりたいとたのみます。「外国せいの機械を使えばいい」という久原に対し、浪平は「日本人が使う機械は日本人がつくるべきだ。われわれもその力をつけてきた」とあきらめません。浪平の熱意に打たれた久原は、1910年（明治43年）、機械づくりのための工場を建てることをゆるします。小さな小屋から始まった浪平の挑戦が、大きな工場に発展しました。

「これからは鋳山で使う機械は部品から全て自分たちでつくろう」

決意も新たに日立製作所が動き始め、機械づくりのための新しい工場も完成しました。「日立製作所」とは日立村の地名から名づけられました。

## 教えて！とち介

### ★モーターって？

電気の力を機械が動くための力に変える機械だよ。せいぞう業ではほとんどの機械にモーターが使われているし、身近なところで洗たく機やそうじ機、エレベーターなどにも使われているよ。今や生活になくてはならない存在なんだ。



# 数々の問題に立ち向かう

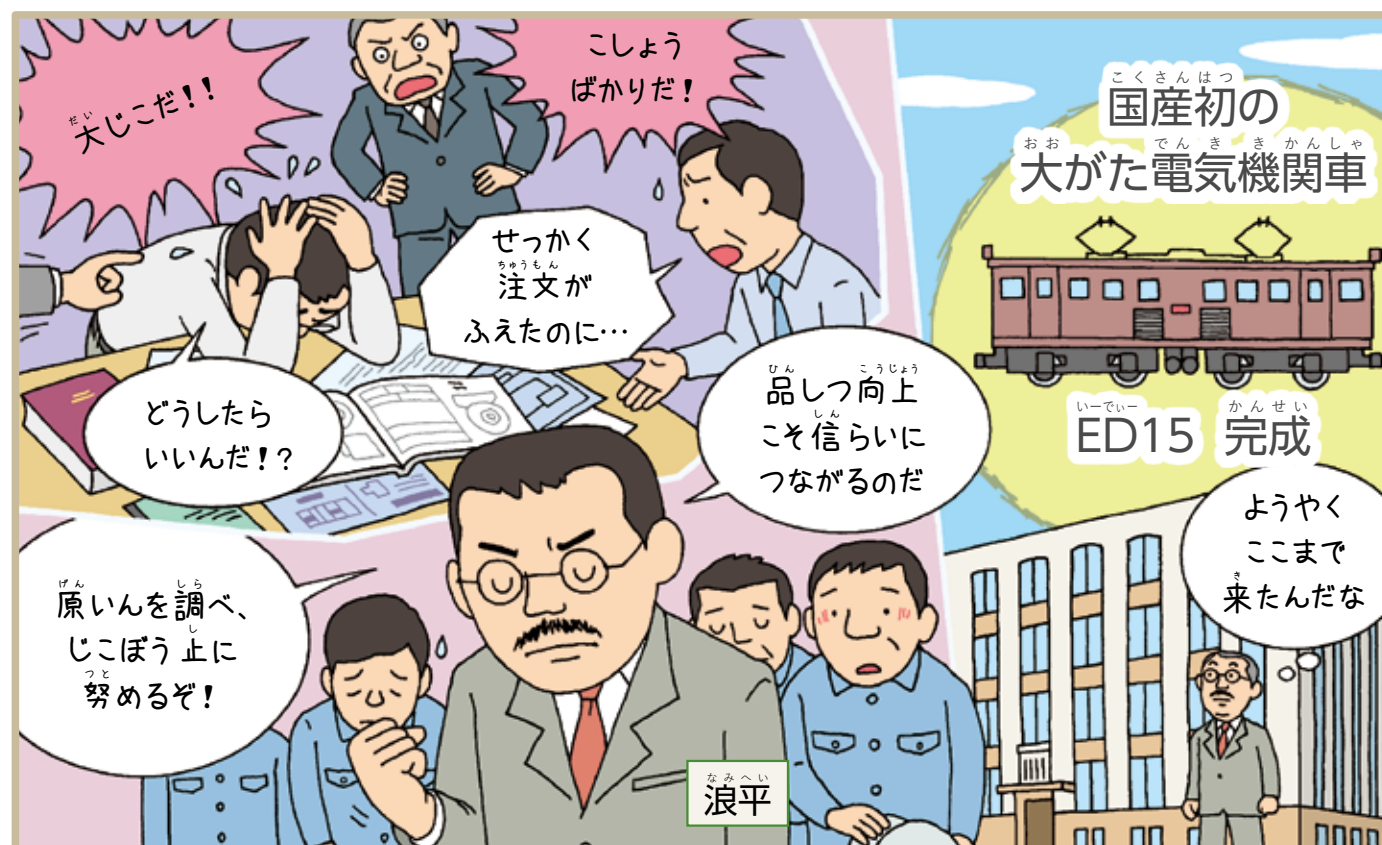


日立製作所ができた始めのころは、注文がなく苦しい時期もありましたが、浪平たちは地道な仕事を続けていきました。1914年(大正3年)に第一次世界大戦が始まり、外国製品が日本に入ってなくなると、日立製作所に注文がくるようになりました。しかし完成した大がたせい品にこしょうなどがたくさん出てしまい、浪平は追いこまれます。

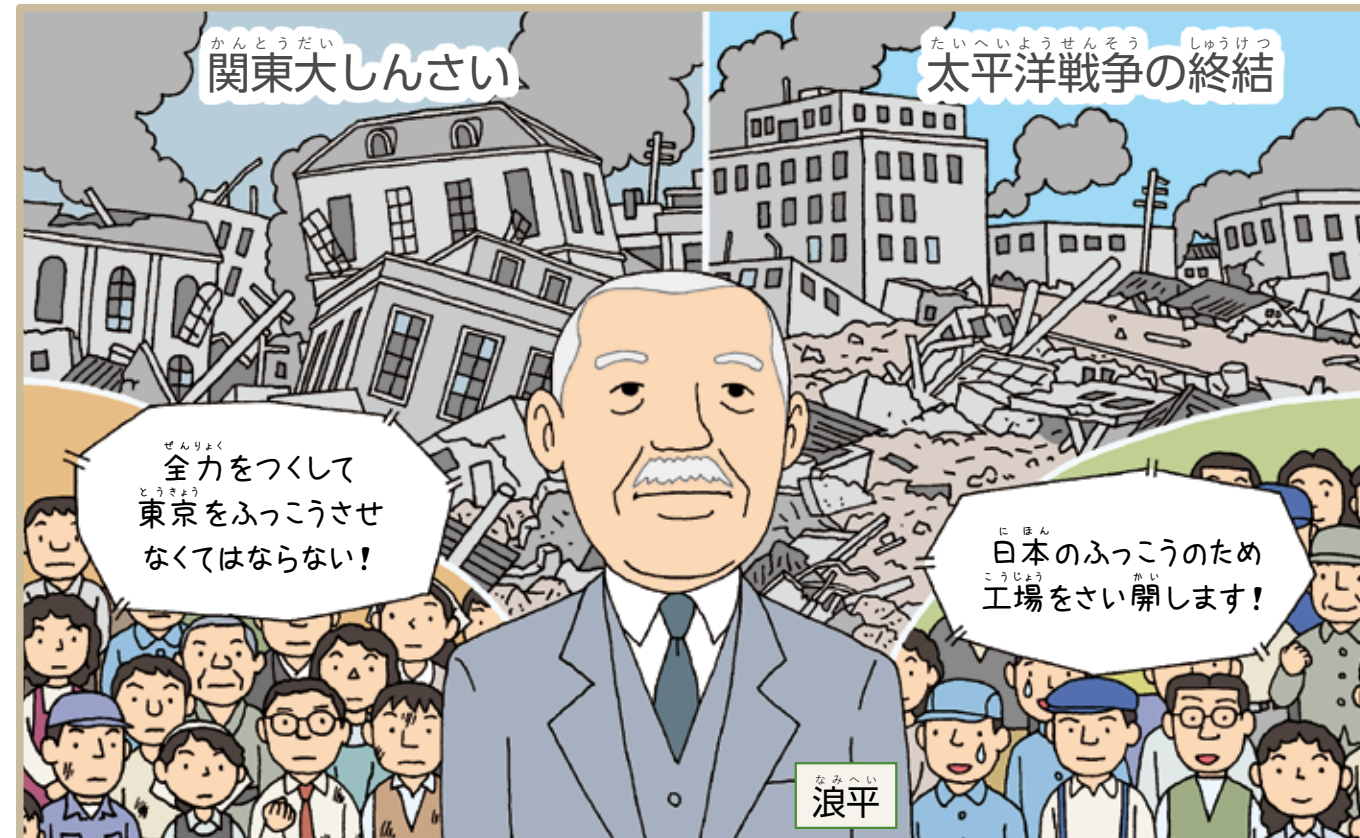
「どうしたらいいんだろうか」

なやんだ浪平が出した答えは「品しつの向上こそが信らいにつながる」ということでした。日立製作所のなかに、こしょうの原いんを調べるためのせん門の部をつくり、ていねいに失敗の原いんを調べ、研究し、次のせい品づくりに生かしていき、日立製作所は順調に信らいを得ていきました。ところが日立の工場が火事で全焼してしまいます。くり返しくり返しピンチが訪れますが、そのたびに浪平は立ち上がり、良いせい品をつくるためにこつこつと努力を続けます。

そして1924年(大正13年)、当時の日本ではつくることができないと言われていた大がた電気機関車を完成させて世の中をおどろかせます。その後、鉄道車両の注文を受けるようになるなど日立製作所は順調に成長し、日本有数の大会社になっていきました。



# 社会にこうけんした一生



何度かべにぶつかってもあきらめない。浪平の不くつのせい神の原動力は、「社会にこうけんしたい」という強い思いからでした。

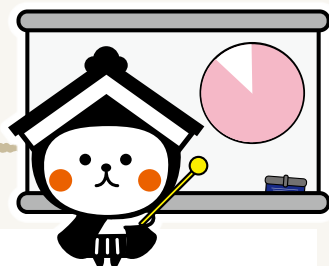
1923年(大正12年)に関東大しんさいが起きたとき、東京は電気関係のしせつにおいても大きなダメージを受けました。そのとき浪平は、「ふっこうが最ゆう先だ」と話し、他の地方からの注文を全てことわり、全工場一丸となってふっこうに力を注ぎます。その結果、地しんからわずか10日後に、東京駅からお茶ノ水駅間に電力がきょう給されて、電車が走り出しました。

こうした活動を通じて、日立製作所は高い信らいを得ていきます。かつては外国せいの機械ばかりを使ってきた日本の会社も、少しずつ国産の機械に目を向けるようになります。

しかし1941年(昭和16年)に太平洋戦争が始まると、全国の日立製作所の工場のほとんどが空しゅうで焼けてしまいました。そんなぜつ望の中でも、戦争が終わると浪平はまた立ち上がり、残った機械をかき集めてふたたび日本のふっこうのために工場をさい開させました。

その後浪平は1947年(昭和22年)に73才で会社を引たいし、77才でなくなりました。浪平の信念である「すぐれた自主ぎじゅつと良いせい品で社会にこうけんする」という日立せい神は、日本を代表するそう合電機メーカー、株式会社日立製作所として、日本のみならず世界の人々のくらしと社会をささえる会社へと発てんした今の時代にも受けつがれています。

# 小平浪平が残した功せき



1

## ◆ 純国産の5馬力モーターをつくった

電気の力を機械が動くための力に変えるモーターは、「機械の心臓」とも言われます。しかし当時の日本ではモーターがつくれず、外国せいにたっていました。そこで浪平が仲間たちと研究・開発を始め、1910年(明治43年)に完成させました。浪平は「モーターは回るもんだが、なかなか回らなかった。やっと回ると、モーターの周りをみんなで手をつないで、うれし泣きしながら回ったものだ」と当時をふり返っています。

このときつくられた純国産の5馬力モーターは、2023年(令和5年)6月に国の重要文化ざいに指定され、今は日立オリジンパーク(18ページ)で見ることができます。



▲ 純国産の5馬力モーター

2

## ◆ 日立製作所をそう業し、日本のものづくりのきそをつくった

今、自動車や家電せい品など多くの「MADE IN JAPAN」が世界中で使われ、日本せいは品しつが良いと信らいされています。しかし浪平が生まれた明治時代は、電気機械はすべて外国せいでした。浪平は「すぐれた自主ぎじゅつ・せい品を通じて社会にこうけんする」という信念で日立製作所をそう業しました。

日立製作所は電気機械だけでなく、1926年(大正15年)には家庭用せん風機をつくり、初めてアメリカにゆ出。「ものづくり大国ニッポン」をつくるきそになりました。今や日立製作所は、身近な家電せい品から社会をささえる交通や水道、じょうほうや通信まで、あらゆる分野に広がる世界的なそう合電機メーカーになっています。

日立製作所は電気機械だけでなく、1926年(大正15年)には家庭用せん風機をつくり、初めてアメリカにゆ出。「ものづくり大国ニッポン」をつくるきそになりました。今や日立製作所は、身近な家電せい品から社会をささえる交通や水道、じょうほうや通信まで、あらゆる分野に広がる世界的なそう合電機メーカーになっています。



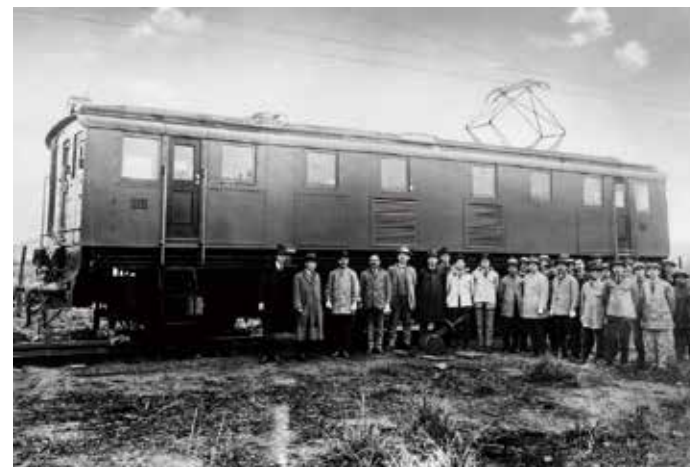
▶ ばん年の浪平とせん風機

3

## ◆ 国産第一号の大がた電気機関車を完成させる

明治時代後半から大正時代、それまでのじょう気機関車が電気機関車に変わっていきます。しかし電気機関車の車体はすべて外国の会社に注文していました。そこで日立製作所は、山口県下松市にある笠戸事業所で大がた電気機関車の自主開発にちょう戦します。鉱山用の小がた電気機関車はつくったことがあるものの、大がたは初めてで大変でしたが、1924年(大正13年)に試作1号機が完成。国産第一号の大がた電気機関車として東海道線を走りました。

今も日立製作所笠戸事業所ではさまざまな鉄道車両をつくっています。新かん線の車両はもちろん、栃木市を走る東武鉄道スペースXの車体も笠戸事業所でつくられています。



▲ 国産第一号の大がた電気機関車

4

## ◆ 日立製作所栃木工場をつくった

1942年(昭和17年)、日立製作所が新しい工場をつくる場所をさがしていと聞いた当時の栃木市長高橋延寿と栃木商工会議所第7代会頭関根源七は、「栃木市のしょう来の発てんのために」との思いで協力し、ぜひ工場をつくってほしいと浪平へお願いをします。市が工場用地に提案したのは太平山を望む平らな土地で、東武鉄道がすぐ目の前を走り、国鉄(今のJR)両毛線にも近い場所でした。日立製作所も、そう業者である浪平ゆかりの地に何か記念を残したいと考えていたため、日立製作所と栃木市の両方の望みが合わさって栃木に工場をつくることになりました。起工式には、浪平もその場所に来てあいさつをしました。

日立製作所栃木工場は、1944年(昭和19年)に完成。896,000m<sup>2</sup>もの広大な面積のこの工場は、今は日立ブランドの「冷ぞう庫」「ルームエアコン」を生産する家電生産のきよ点となっています。

日立製作所栃木工場は、1944年(昭和19年)に完成。896,000m<sup>2</sup>もの広大な面積のこの工場は、今は日立ブランドの「冷ぞう庫」「ルームエアコン」を生産する家電生産のきよ点となっています。



▶ 栃木工場の起工式であいさつをする浪平

# とちぎし 栃木市のゆかりのしせつ



## ◆ おだいらなみへいせい 小平浪平 生たん地



とちぎしつがまちかっせんば いまのこ  
栃木市都賀町合戦場に今も残る  
おだいらなみへい うえ いえ  
小平浪平が生まれた家です。  
2018年(平成30年)に、小平浪  
平の親族が土地と建物を栃木市に  
ゆずり、今は市が管理しています。  
よやくをすれば、浪平が子どものころ  
に勉強にはげんだ勉強小屋や、生  
活していたおもや けんかく  
母屋などを見学できま  
す。

おだいらなみへいせい 小平浪平 生たん地  
ホームページ



## せいもん 正門



おだいら け かつせんば こうだい た  
小平家は合戦場の広大な田んぼや  
畑、山林を所有する大地主でした。

## きねん 記念ひ



せいもん ひ たちせいさくしよ しゅう  
正門のそばには、日立製作所50周  
年に久原房之助が書いた小平浪平生  
たん地の記念ひがあります。

## おもや 母屋



なみへい かぞく す たてもの なみへい  
浪平が家族と住んでいた建物。浪平  
が東京へ行った後も、浪平の母と兄た  
ちが住み続けていました。

## べんきょうごや 勉強小屋



なみへい さい どうきょう い  
浪平は14才で東京に行くまで、この  
建物で勉強にはげんでいたと言われて  
います。

## とちぎしりつぶんがくかん 栃木市立文学館

とちぎし かんけい さっか ぶんがくさくひん  
栃木市に関係がある作家や文学作品に  
関するてんじや、市のれきしに足せきをの  
こした人たちに关するてんじがあり、小平  
浪平もしょうかいされています。

てんじの中には、浪平がつくった純国産  
5馬力モーターのレプリカを見ることができ  
ます。

ぶんがくかん たてもの ねん たいしゅう  
文学館の建物は、1921年(大正10  
年)に当時の栃木町役場として建てられま  
した。2014年(平成26年)まで約90年  
のあいだ町役場・市役所として使用されて  
いました。

とちぎしりつぶんがくかん 栃木市立文学館  
ホームページ



▲ おだいらなみへい ぎょう 小平浪平の業せきをしょうかいするてんじ



栃木市立文学館



浪平9才(右)と、兄の儀平(左)



浪平が合戦場にいたころにかいた作品



浪平、大学生時代(明治32年秋撮影)



浪平、妻の也笑と最後の旅行

| 年齢     | 0才                                                 | 6才                | 11才          | 14才                                         | 17才                  | 19才                        | 22才                                          | 26才                                              | 30才                       | 31才             | 32才                     | 34才                                     | 36才           | 45才            | 46才            | 50才            | 55才            | 68才            | 69才                       | 70才            | 72才            | 73才            | 77才            |                |                |                |
|--------|----------------------------------------------------|-------------------|--------------|---------------------------------------------|----------------------|----------------------------|----------------------------------------------|--------------------------------------------------|---------------------------|-----------------|-------------------------|-----------------------------------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 西暦(元号) | 1874年(明治7年)                                        | 1880年(明治13年)      | 1885年(明治18年) | 1888年(明治21年)                                | 1891年(明治24年)         | 1894年(明治27年)               | 1896年(明治29年)                                 | 1900年(明治33年)                                     | 1904年(明治37年)              | 1905年(明治38年)    | 1906年(明治39年)            | 1908年(明治41年)                            | 1910年(明治43年)  | 1919年(大正8年)    | 1920年(大正9年)    | 1923年(大正12年)   | 1924年(大正13年)   | 1929年(昭和4年)    | 1941年(昭和16年)～1945年(昭和20年) | 1942年(昭和17年)   | 1943年(昭和18年)   | 1944年(昭和19年)   | 1946年(昭和21年)   | 1947年(昭和22年)   | 1951年(昭和26年)   |                |
| 出来事    | 1月15日、小平家の次男として、栃木県下都賀郡家中村合戦場(今の栃木県栃木市都賀町合戦場)で生まれる | 淑慎学舎(今の合戦場小学校)に入学 | 栃木小学校に転校     | ・東京英語学校に入学<br>・下都賀寒川郡立第一高等小学校(今の栃木中央小学校)を卒業 | 第一高等学校(のちの第一高等学校)に入学 | 小説家・村井弦斎に相談して電気工学を学ぶことを決める | ・東京帝国大学工科大学(今の東京大学工学部)電気工学科に入学<br>・第一高等学校を卒業 | ・秋田県の藤田組小坂鉱山に入社、久原房之助と出会う<br>・東京帝国大学工科大学電気工学科を卒業 | 小坂鉱山を辞め、広島水力電気(今の中国電力)に入社 | 東京電燈(今の東京電力)に入社 | 鉱山の仕事のあい間に電気機械のしゅう理を始める | 久原房之助にさそわれ、東京電燈を辞めて久原鉱業所(今のJX金属)日立鉱山に入社 | 日立にある工場が火災で焼失 | 日立製作所の取締役社長になる | 日立製作所の取締役社長になる | 日立製作所の取締役社長になる | 日立製作所の取締役社長になる | 日立製作所の取締役社長になる | 日立製作所の取締役社長になる            | 日立製作所の取締役社長になる | 日立製作所の取締役社長になる | 日立製作所の取締役社長になる | 日立製作所の取締役社長になる | 日立製作所の取締役社長になる | 日立製作所の取締役社長になる | 日立製作所の取締役社長になる |



# もっと深く学びたいときは

## 日立オリジンパーク (茨城県日立市)



日立オリジンパークの  
ホームページ



「小平記念館」「創業小屋」「大みかゴルフクラブ」「大みかクラブ」が集まった日立製作所のしせつです。「小平記念館」では、小平浪平が日立製作所を創業するまでの歩みや、日立グループのれきしなどを見ることが出来ます。「創業小屋」は日立製作所の原点である日立鉱山の工作課しゅう理工場をふく元した建物で、当時の5馬力モーターが動く様子などを見ることが出来ます。

## 日鉱記念館 (茨城県日立市)

日立製作所のきそともいえる日立鉱山のれきしを学べるJX金属のしせつ。日立鉱山のあと地に建てられたこの記念館には、日立鉱山のれきしや大えんとつなどをしょうか



いする「本館」のほか、鉱山で使用した機材、鉱石などをてんじした「鉱山資料館」などがあります。また1960年(昭和35年)まで運行していた鉱山電車の当時の様子をきちょうなえいぞうで見ることが出来ます。

日鉱記念館の  
ホームページ



### 表紙の写真

- 小平浪平生たん地
- 国産初の大がた電気機関車
- 浪平の父・惣八が舟運の事業で使った鉛丹
- 日立製作所栃木工場の起工式であいさつする浪平
- 栃木市立文学館
- 日立オリジンパークにある純国産5馬力モーター
- 栃木市立文学館内の小平浪平のてんじ
- 小平浪平生たん地の石ひ
- 子どものころの兄・儀平(左)と浪平(右)
- 日立製作所製のせん風機とともにほほえむ浪平



### 裏表紙の写真

- 小平浪平生たん地の中庭のさくら
- 小平浪平生たん地の中庭にあるつるべ井戸
- 小平浪平生たん地にある作業小屋
- 小平浪平生たん地の中庭への通路
- 浪平が筆で書いた「以和為貴(わをもってとうとしとなす)」

令和7年2月28日発行

発行：栃木市

〒328-8686 栃木県栃木市万町9番25号

協力・資料提供

小平浪平翁記念会 / 株式会社日立製作所(日立オリジンパーク) / JX金属グループ 日鉱記念館



<https://www.city.tochigi.lg.jp/soshiki/2/76092.html>



「以和為貴(わをもってとうとしとなす)」とは、  
 「人々が仲良くすることこそ、<sup>ひとびと</sup> <sup>なか</sup> <sup>よ</sup> <sup>もっと</sup> <sup>たいせつ</sup> 最もとうとく、大切なことである」  
 という意味です。小平浪平は、<sup>い</sup> <sup>み</sup> <sup>お</sup> <sup>だいら</sup> <sup>なみ</sup> <sup>へい</sup> <sup>ふる</sup> 古くからあるこの<sup>こと</sup> <sup>ば</sup> <sup>たいせつ</sup> 言葉を大切にしていました。